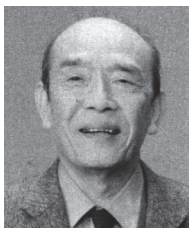
■証言：戦後社会党・総評史

社会党生活32年

社会民主主義とマルクス主義の狭間で
――横山泰治氏に聞く



――今日は，社会党国民生活局長，別府大学教授を務められた横山泰治さんにお話を伺うことになっています。１時間半ほどお話しいただき，その後，質疑ということにしたいと思います。よろしくお願いいたします。

横山　横山です。今日は私の社会党時代の活動経歴につき，おしゃべりをする機会をいただき，ありがとうございます。自分の活動総括をしたいと思っていたので，よい機会を与えていただきました。お手元の資料にもとづいて，お話し申し上げたいと思います。

１　左社政策審議会事務局員に

まず，左社政策審議会事務局員になったいきさつです。私は1953年に偶然の機縁で社会党本部に入りました。当時，社会党は左右に分裂していて通称左社と呼ばれていた日本社会党（左派）の政策審議会事務局員になったわけです。それは同時に左社の党員，本部書記になったことを意味しました。偶然の機縁というのは，たまたま知り合った代議士の松原喜之次さん（1895～1971年）が左社の政策審議会事務局長をやっていて，事務局員になる新人を探していたのです。当時，左社は「平和四原則」（全面講和，中立堅持，再軍備反対，軍事基地反対）を掲げて総評の支持のもとに選挙のたびに躍進しており，本部職員も人手不足になっていたのです。その松原さんが「政策審議会長の和田博雄さんのところで国政の勉強をしてみないか」と私に誘いをかけてきました。和田博雄さん（1903～1967年）という人は農林官僚出身で戦後の第１次吉田内閣で農林大臣，次いで片山内閣で経済安定本部長官として活躍し，そののち政界に転じて社会党に入党し，世間からは将来の革新政権の首相候補と目されていた「時の人」でした。その和田さんのところで「国政の勉強を」ともちかけられ，私はすぐオーケーしてしまいました。野党の立場での国政の勉強はよい経験になると思ったからです。

２　「ＭＳＡに挑戦して」長期ビジョンの試み

こうした経緯で政策審議会に入ったわけですが，和田さんが政審会長としていちばん力を入れたのが社会党の長期平和経済計画「MSAに挑戦して」でした。これは官僚出身でなければ思いつかない発想です。MSAというのはアメリカの法律でMutual Security Act，相互安全

本稿は，2014年３月23日（日）に，法政大学市ヶ谷キャンパス80年館円卓会議室において開催された，第12回社会党・総評史研究会の記録である。出席者は，雨宮昭一，有村克敏，五十嵐仁，岡田一郎，園田原三，浜谷淳，細川正，枡田大知彦，山口希望，横山薫子，木下真志であった。

事前に横山氏にお話しいただく内容についてお伝えし，それに基づきお話しいただいた部分と質疑応答とに分けた。読者の便宜を考慮し，中見出しを付した。（木下　真志）

保障法です。これをもとに日米の間でMutual Defence Assistance Agreement相互防衛援助協定というのが結ばれたわけで，そのような軍事化の方向ではなく日本は平和経済の方向を目指すべきだとする長期ビジョンを示したものです。協力してくれた現役官僚もいて，経済の諸指標もあれこれ並べて作成したものです。いま考えてみると，これを作った意味はたいへん大きかったと思います。

というのは，長期経済政策を作成する作業は和田会長の後の代々の政策審議会長にも年中行事のように受け継がれ，その作成の時には政審会長はじめ関係議員やわれわれ事務局員もいっしょになってトータルビジョンのあり方を討議し，識者からのヒヤリングも重ね，長期構想との関連で個別政策も考えるという習慣がついたからです。これに関して思い出すのは，井出以誠さん（1909～1982年，佐賀出身の政審会長）の時に，長期政策の作成に際して皆さんの作る政策は官僚の作文のようで難しいから，もっと易しく書いてほしい，たとえば「二階から目薬」といったような譬えを使えば誰でも分かる，という注文がつきました。言われてみて私たちも「なるほど」と思い，以来，できるだけ易しく書くように心がけたものです。この時の長期政策のキャッチフレーズは，井出会長も加わった討議の結果，「明日への期待」となりました。

長期政策に関して今の民主党について感想を述べれば，民主党はあれだけ国民の期待を担って政権の座につきながら内政外交ともスローガンばかりで，国政運営のビジョンや政策について事前の討議も足らず，思い付きの政策ばかりだという感じを受けました。最後は官僚にもバカにされている様子ありありで国民からも見放されました。民主党には，自公政権にとって代わるようなビジョンと政策をしっかり作ってもらいたいものです。

3　唯物史観と常識（良識）との矛盾に悩む

私は旧制佐賀高校のとき自治会のクラス委員として授業料値上げ反対の学生ストに参加したくらいで，政治活動の経験はありませんでした。ただ政治に関しては自分なりに一つの考えを持っていました。第２次大戦直後に政権をとった英労働党アトリー政権が「揺り籠から墓場まで」の包括的社会保障制度を世界で初めて実施したことに感銘を受けたのです。そして議会政治の伝統をもつ高度資本主義国の日本では，議会を通ずる民主改革が社会改革の道だ，というごく常識的な結論に達していました。ただ佐賀高校のとき，スト中の学生自治会による自主管理授業で外部の講師から唯物史観・マルクス主義の手ほどきを受け，生産力の発展が生産関係を変え，資本主義から社会主義，共産主義へと社会が発展していくのは歴史的必然だという考え方を聴いて，これこそ科学的な歴史観だとそ

横山泰治氏略歴

1929年　朝鮮京城市生まれ（本籍長崎県壱岐市）。
　東京大学文学部社会学科卒業。
1953年　日本社会党（左派）本部政策審議会書記となる。
　左社綱領作成委員会発足。
1954年　向坂逸郎主催・資本論研究会に参加し，社会主義協会会員となる。
1970年　同党中央執行委員（国民生活局長）に選出される。
1974年　訪ソ代表団の団員としてソ連，東欧訪問。
1977年　党大会で対抗馬（向坂派社会主義協会）と決選投票。協会を離れる。
1985年　訪中代表団の団員として中国を訪問。
　同年10月　中央執行委員を辞し，別府大学教授に就任。護憲大分県民会議代表を兼任。
1999年　同大学を定年退職。
　著書『現代社会政策と日本的労使関係』（1985年，未来出版），『現代の汚職』（1967年，三一書房）。

の時は思いこみました。しかし，唯物史観を受け入れたことで私は常識的には社会民主主義，理論は唯物史観・マルクス主義革命論というねじれ構造を自分自身の中に内蔵することになり，この矛盾に長く悩まされました。この矛盾から最終的に解放されたのは，ソ連・東欧体制が崩壊してプロレタリア独裁という概念，すなわち政治革命で権力を握った後，資本主義の体制変革のため独裁体制で社会革命を達成するというプロレタリア独裁概念の虚構性を，歴史的現実の問題として実感してからでした。

4　和田政審会長と話が合う

左派社会党に入るとき，最初に和田政審会長の面接を受け，話題がイギリスの政治学者ハロルド・ラスキにも及んで，私は話が合ったような気がしました。戦後，自由とか民主主義とか，それまで聞き慣れなかった言葉が氾濫し始めた頃，ラスキの『近代国家における自由』という本など読んで，自由とは何かということを真剣に考えたものでした。ラスキは学者ながら英労働党左派系で党の幹部役員までやった人で，和田会長の考えはその英労働党左派に近く，衆議院の２階控室にあった政策審議会事務局には労働党左派系の新聞「New Statesman」が綴じてぶら下げてあり，和田さんはそれを読むよう皆に勧めていました。

5　左社綱領―戦前の日本資本主義論争の再現

日本資本主義論争とは，ご承知のように戦前，岩波書店の『日本資本主義発達史講座』を執筆した共産党系の学者と，それに対立する考えの雑誌「労農」に拠る左派系の学者が，学術論争の形で日本における革命の戦略論争を行ったものです。1950年代前半，時代は保革勢力による二大政党中心の議会制民主主義実現を志向しており，左右社会党は再統一へと進んでいました。この状況に，これまでのばらばらな連合戦線党的な党の体質を改めて明確な党綱領をもつべきだとの声が強まり，再統一前に左社綱領を作ることになりました。党綱領作成を強く推進したのは労農派マルクス主義グループの社会主義協会（以下，協会）です。

協会は戦前の講座派系学者との理論対立，簡単に言えば講座派は，日本はまだ半封建的な体制の国だからまず民主主義革命が必要で社会主義革命は次の段階という２段階革命論です。それに対して労農派は，日本は高度資本主義国で民主主義もそれなりに進んできているのだから社会主義革命が当面の戦略だという１段革命論です。その対立の型を，協会は左派社会党と日本共産党との綱領次元の論争で再現しようとしました。つまり，１段革命論としての社会主義革命論，議会を通ずる平和革命論を持ちこみ，当時火炎瓶で交番を襲う武力闘争路線に走っていた日本共産党の２段階革命論，戦後は民族独立民主革命から社会主義革命への２段階となっていた革命論に対置させたわけです。

党内に綱領作成委員会がつくられ，委員長は和田政審会長が兼務することになりました。その綱領委員会の事務局をやるということで，政審事務局に野中卓（1926 ～ 2001年）という向坂逸郎（1897 ～ 1985年）先生直系の青年が送り込まれてきました。彼は海軍兵学校75期生で77期生の私の先輩に当たり，在校中は面識はありませんでしたが，すぐ私に接近してきました。彼は九学連（九州地域大学学生自治会連合会）のオルガナイザーで元共産党活動家です。政策審議会に私と同時期に入った高沢寅男（1926 ～ 1999年）はかつての都学連委員長で終戦時は陸軍士官学校生徒，こちらも元共産党です。元共産党組が党内で大いに巾を利かせる雰囲気でした。

6　向坂「資本論研究会」に参加

野中はすぐ私を向坂邸での資本論研究会へと誘いました。著名な向坂先生のもとで「資本論」を勉強できると思って参加した私は，たちまち向坂一派に加えられてしまいました。私の内なる唯物史観的思考が労農派マルクス主義の革命論と共振したことは疑いありません。研究会は「資本論」の勉強はそこそこに議論は左社綱領の作成問題に集中しました。私はマルクス主義革命論に古臭さを感じましたが，総評労働運動の場で社会党系が共産党系に対して平和革命論で理論的優位に立つためだ，といわれて反対できませんでした。しかし今にして思うと，労農派マルクス主義の革命論を左社綱領に採用したことは社会党の「躓きの石」だったと思います。左社綱領の考え方が55年体制下の社会党内の左右論争で左翼バネとなり，社会党の行動を時代遅れのものにしたからです。

7　躓きの石としての左社綱領―SPDと日本社会党の比較

ドイツ社民党（SPD）と比べると，日本社会党の時代遅れの足どりが浮き彫りになります。1950年代後半のほぼ同じころ，当時の西ドイツ社民党（SPD）も日本社会党も議会勢力は３分の１余り，同じくらいの政治勢力だったわけです。日本社会党の方は左右妥協の産物の統一綱領を作ったものの左社綱領の革命論発想を残したのに対し，SPDでは激しい党内論争を経て古いマルクス主義的綱領を捨て，1959年に自由，人権，民主主義を基調とするゴーデスベルグ綱領，正確にはバート・ゴーデスベルグ基本綱領を採択しました。その綱領にもとづいて政権戦略を練り，ブラント党首を首相とするSPD単独政権を実現したのです。以来，SPDはドイツの政権党ないしそれに準ずる地歩を確保しています。それに比べると社会党の後身の社民党は今や消滅寸前の姿で，私は痛恨の思いで両者の対照的な足どりを思い，微力な自分を反省しているわけです。

8　社会主義協会との決別

ちょっと時間を先取りして社会主義協会をやめた経過を述べたいと思います。向坂・資本論研究会に入ったことで私は社会主義協会の看板を背負うことになり，中央執行委員になってから大会の役員選挙でも協会の支援を受けていました。ところが1977年の党大会で，私が向坂派協会の社会党強化方針に中央執行委員会の場で反対せざるをえない事態が起こりました。向坂先生は自分はマルクス・レーニン主義者だと著書に書いておられますが，社会党を革命党にするため協会を実践部隊化して「社会党を強化する会」をつくり，事務所も設けて「党内党」的活動を活発化させ，それに党内各派閥が反発したのです。

協会の指導者，山川均さん（1880～1958年）は，協会の役割は社会党に理論を提供する「風呂たき」だと位置づけられていました。私は同じ考えでしたから「風呂たき」を止めて協会がマルクス・レーニン主義のテーゼを採択し，実践部隊化することには納得できませんでした。私が向坂派協会の動きを行き過ぎとして反対したため協会の反感を買い，1977年大会の役員選挙で協会は木原実（1916～2010年）代議士，私は個人的には仲がよかったのですが，木原さんを私の追い落としのために中央執行委員・国民生活局長の対立候補に立ててきました。私は無派閥で始めは風前の灯のような感じでしたが，日ごろ付き合っていた国会の社労委員，大原亨さん（1915～1990年）とか村山富市さん（1924年～）とか多賀谷真稔さん（1920～1995年）といった各県代議員に影響力のある人々が大会場を回って私を応援してくれ，結果

的には投票数で私が大勝して中執の座を守ることができました。この勢いにのって青少年局長のポストは太田派協会の故深田肇君（1932～2012年）が向坂派の対立候補を破って当選し，深田君には感謝されたものです。私が協会から離れたのには，そんな事情がありました。

9　社会党内派閥の対立

私は左社綱領作成論議の始まった1954年に肺結核２期と医者から診断され，急きょ中野国立病院に入院して１年間，療養生活を余儀なくされました。このため，綱領委員会の左社綱領作成の論議には参加できませんでした。復帰したのは再統一後の1955（昭和30）年です。統一社会党は，岸内閣と対決する一方で，党内では派閥間対立がひどくなっていました。私が左派社会党に入った頃は派閥などなかったので驚きました。和田さんは政審会長のあと左社書記長をやり，統一後はまた政審会長でしたが，委員長の鈴木茂三郎さん（1893～1970年）はじめ戦前無産運動をやってきた人たちと官僚出身の和田さんとは肌合いが合わなかったのでしょうか，党内に鈴木派と和田派の派閥ができ，それに平和同志会，農民同志会などの左派系派閥と，西尾末広（1891～1981年）派，河上丈太郎（1889～1965年）派など旧右社系もあり，新聞などでは「社会党８個師団」などと冷やかされていました。私は社会主義協会の社会党本部班に属していましたが，本部班の書記は左社綱領作成の責任者だった和田政審会長の派閥，和田派に入っていました。

10　政審訪中団事務局長として中国，北朝鮮を訪問

60年安保闘争の後，政治的空白の期間ができたとき，書記局中心に地方議員など加えて政策審議会代表団というものをつくり中国を訪問しようという話が持ち上がりました。たまたまその話の時に姿を現した浅沼稲次郎委員長（1898～1960年）が「行ってこいよ」と勧めてくれて，政策審議会の年配書記の手島博さんを団長に私が事務局長という構成で，約１か月間，香港経由で広東，上海，北京というコースを回りました。どこでも「安保闘争の最前線で戦った戦士」として歓迎されました。前年の第２次社会党訪中代表団で浅沼団長が行った「アメリカ帝国主義は日中両国人民共同の敵」との談話で中国側は我々を戦友扱いしてくれたのです。この団は，最後に北京から飛行機で北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の平壌に飛び，一週間ほど滞在して各地を見学しました。ここでも大歓迎され，宴席では金日成国家主席が私たちのテーブルにやってきて一緒に乾杯などしました。この両国の訪問は，現実の社会主義国について感触を得たという意味で私には良い経験となりました。

11　構造改革論の提起

中国から帰国して間もない10月12日に，私たちの訪中を後押ししてくれた浅沼委員長が日比谷公会堂で右翼少年の凶刃に倒れました。その翌日の臨時党大会で，江田三郎委員長代行（1907～1977年）が提案した「反独占，中立，生活向上」を柱とする構造改革方針が満場一致で採択されました。この構造改革論が，その後，大論争を呼んだわけです。もともとイタリア共産党のトリアッチ指導部が綱領的宣言で打ち出したもので，当初，日本では「構造的改良」という言葉で紹介されていました。この言葉には，現代的な社会変革の語感がありました。イタリアでは労働総同盟が「逆スト」をやる，つまり仕事がなく失業している労働者が勝手に道路工事などやってその賃金支払いを自治体に要求し，自治体がそれを払う，仕事を止めて賃上げ要求

するストライキとは逆で，こうした大衆運動を背景にしたものと解説されていました。西欧最大の200万党員を擁するイタリア共産党ならではの提起だ，と思ったものです。「構造的改良」の言葉には，「革命か，改良か」の従来論争の次元を超える現代的な響きがありました。

しかし，構造改革派に影響を与えた佐藤昇さん（1916～1993年）は「構造改革論はマルクス・レーニン主義の最先端理論だ」との論陣を展開していました。私はそれを読んでがっかりして，マルクス・レーニン主義の範疇でそんなことを言っているようでは仕様がないなと思い，社会党の中で提起されている構造改革論はしょせん借りものだとの感じを持ちました。イタリア共産党のような大衆運動を背景にした民主的改革路線だと言われたら，案外，私は構造改革論に衣替えしたかも知れません。構造改革派の中心メンバーの一人だった貴島正道さん（1918～2008年）は，自分たちの社運研（社会主義運動研究会）も構造的改良とはいっても社会民主主義までは行けなかった，という趣旨のことを書いていますが，私は構造改革の推進，反対の如何にかかわらず社会党全体が現実の社会主義国の実態を十分調査分析もせず，ロマンとしての社会主義思想に捉われていたような気がします。

12　構造改革論争の中で無派閥に

構造改革論争で，これを改良主義として反対する左派と推進する江田派などの対立が激化しました。1962（昭和37）年1月の党大会で，構造改革推進派の江田派，河上派，和田派の3派連合ができ，構造改革反対の佐々木更三（1901～1985年）派，平和同志会，農民同志会と対立する構図ができました。社会主義協会は，構造改革論を改良主義として理論的に批判し，左派の諸派閥と連携しました。このとき，立場がおかしくなったのが和田派の領袖である和田博雄さんです。自らは左社綱領作成の責任者ですから，スジとして左社綱領否定の構造改革論には賛成できず，また私の聞いたところでは社会タイムス社長だった江田さんが借金を和田さんに押し付けて和田さんは生涯苦労されたという事情もあったようで，そんな不信感もあって和田さんは江田さんの提起した構造改革論に反対の立場をとりました。そして一人だけ派閥を離れたわけです。この時，和田さんと行動を共にしたのが原茂（1913～1997年）代議士で，社会党の議員としては珍しく長野県諏訪の原電機社長でした。この人が和田さんと一緒に無派閥となりました。私ら協会本部班の書記局メンバーは和田，原両議員と共に無派閥で行動することになり，以来，私は無派閥で通すことになったわけです。

原さんは後に社会党財政の立て直しを期待されて，中央執行委員・財務委員長の重職に就きましたが党財政の立て直しは容易ではなく，やがて財務委員長のポストを降りることになります。その後釜の中央執行委員ワクを私にやれと仲間たちが言い出し，私は原さんが辞めた後の中央執行委員の1ポストを国民生活局長として受け継ぐことになりました。党内派閥力学で押し出されたわけです。

13　マルクス主義経済学に失望

マルクス主義理論に関して，私は高度経済成長のさなかに窮乏化法則を持ち出して「労働者階級は相対的に窮乏化している」と論ずる自称マルクス主義派が跡を絶たないのに呆れました。東京オリンピック後の「四十年不況」に際して「この不況は停滞局面の長い過剰生産恐慌の性格をもっている」と論じたマルクス主義経済学者がおり，そんなものかなと思っていたところ，「四十年不況」は当時の福田内閣が財政

法では原則禁じている国債を但し書き条項を使って発行したことにより好況に転じました。そして「いざなみ景気」といわれる未曾有の好況をもたらしました。その発展の中で日本のGNPも世界第２位と大きくなったわけで，私は経済の動態分析に弱いマルクス主義経済学にがっかりしました。私は都留重人さん訳の『サムエルソン経済学』を読んだりしました。（ポール・サミュエルソン，1915 ～ 2009年。アメリカの経済学者。ノーベル経済学賞受賞）

14　中央執行委員・国民生活局長に

さきほど申し上げた経過で1970（昭和45）年11月党大会で，私は中央執行委員・国民生活局長に選出されました。ちょうど総評・社会党ブロックの生活闘争，当時の総評・岩井事務局長がイタリア総同盟の大衆運動にヒントをえて，総評も賃金，労働条件だけでなく勤労者生活に結びついた運動をやる必要があるということで，公害反対，物価値上げ反対はじめ，総評や自治労などと呼吸を合わせて，たとえば救急医療の体制改善の国会闘争を地域の要求運動と結びつけてやるといった，様々な生活闘争に力を注ぎました。

15　訪ソ活動家代表団団長としてソ連を訪問

この間，1973年には訪ソ活動家代表団の団長としてソ連と東欧を訪問しました。旅行の合間に保養地ソチで一泊した夜，私たちに随行していたソ連の人たちは保養地で気が弛んでいたのでしょう，偶然，宿舎の同じ棟のすぐ隣の広間で飲食していたレニングラード大学の女子学生たちと交流する機会がありました。ビールをすすめたら，酔うほどに彼女たちは「共産党幹部の子弟は日常の買い物でも何でも特権的に買えて，けしからん」と，大いに気炎をあげていました。共産党独裁のソ連社会の歪みを垣間見た気がしました。

16　第５次訪ソ代表団の一員としてソ連，東欧を訪問

1974年に第５次訪ソ代表団，団長は石橋政嗣書記長（1924年～）です。この時の「スースロフ・石橋共同声明」がソ連のいうアジア安保を容認しているということで，後に親中国の佐々木派から猛攻撃を食うことになります。（ミハイル・スースロフ，1902 ～ 1982年。ソ連の政治家）

17　第11次訪中代表団の一員として中国を訪問

1985年，第11次訪中代表団のメンバーとして中国を訪問しました。このときの団長は当時の田辺誠書記長（1922年～）です。このときは胡耀邦（1915 ～ 1989年）総書記と会談しました。胡耀邦という人は小柄ですが非常にエネルギッシュな感じで，会談していても立ち上がって歩きながらお喋りする，雄弁で闊達な人柄で，新しいタイプの指導者像を感じ，こういうリーダーをもつ中国共産党はなかなか大したものだとの印象を受けました。ところがその後，民主化運動に理解を示したとの理由で失脚してしまいました。独裁権力維持のために硬直化している中国共産党は，胡耀邦のような幅の広い智恵のある指導者を受け入れられないのだろうか，との思いを今でも持っています。以上で私の話は終わらせていただきます。

――ありがとうございました。1985年までお話が終わったわけです。85年10月以降について少し補足していただけたらと思うのですが，いかがでしょうか。

資料には，10月に中央執行委員の職を辞し，別府大学教授となると書かれていますが，突然職を辞されたように見えるのですが，どうして

かということ。社会党の書記を辞められてすぐ大学教授になるのはなかなかのことだと思うのですが，それはなぜなのか，どうして可能だったのかということ。

別府大学教授として大分で活動されることになり，平松知事のブレーンとして一村一品運動などにかかわったということも目にしたのですが，85年10月以降のことについて，このプロフィールに書かれていることを多少補足するような形で補っていただければと思いますので，よろしくお願いします。

横山　辞めたのは別府大学の方から来てくれという要請があったのです。

――向こうの方からですか。

横山　はい。それと，私は85年で中央執行委員を15年ほどやっていましたので，ちょっと長すぎるのじゃないかという人もいて，また同じ地位にずっといると多少マンネリにもなります。ただ私は中央執行委員をやりながら，東海大学で非常勤講師として何年間か社会政策の講義を持っていました。

――東海大学総長との関係があったのですか。

横山　総長から直接要請を受けたわけではないのですが，東海大学には私の先輩が居たものですから。先ほど述べた野中卓さんがある事情で社会党を辞め，別府大学の短期大学部学長になっていて，私を引っ張ってくれたのです。当時，別府大学の財政再建のために乗り込んで建て直しをした小松幹さん（1914～1990年）という元社会党代議士の実力者がいました。お二人で私を招いてくれたのです。私も第二の人生を大学教員で送るのも悪くないなと思い辞めたわけです。私は政策審議会で社会保障や労働関係を担当していた関係で，雑誌に論文なども発表しており，また社会政策の著書もありましたから，別府大学の教授会の審査も通ったわけです。

大分県では，平松さんのブレーンではありませんが，平松知事のとき県から頼まれて県の生涯教育センターの講師をやりました。大分県内の各地から元警察署長とか元教育長とか地域のそうそうたる人たちが来ていて，中には自民党どこどこ支部長もおり，地域社会に自民党が根を張っていることを実感しました。運動の方では，憲法擁護大分県民会議の代表委員もやりました。

質疑応答

――では再開します。質問があれば出していただきたいと思います。

横山　ひとつ言い忘れたことがあります。資料プロフィールの一番下になります1997年のことについて。大分社会党県連や県労連のメンバーと一緒にヨーロッパ訪問の代表団，村山富市さんを名誉団長にした代表団を構成し，スウェーデン社会民主党，英労働党，仏社会党，独社会民主党を訪問し，友好交流をかねた意見交換などしてきました。スウェーデン社会民主党は社会大臣（日本の厚労相）もやったインゲラ・タリーン書記長，なかなか見識のある女性書記長が出てきて，代表団に入っていた私の妻（薫子）が担当主査となってかなり突っ込んだ議論もしました。ドイツ社会民主党はラフォンテーヌ党首も顔を出し，左派の理論家らしく日本社会党には親近感を持っていた人のようで，私の妻など一緒に写真を撮っています。様々な理論と実践の中で人間の尊厳と権利を求めて福祉国家を実現してきた社会主義インター諸党の

実績に思いを馳せ，私は深い感慨にとらわれていました。

平和四原則をめぐって

――最初のところで平和四原則のお話がありましたが，このときに左派社会党が選挙のたびに躍進したとあります。この文脈だと平和四原則を掲げていたので選挙のたびに躍進したと読めますけれども，ほかに左派社会党が躍進した要因はありますでしょうか。

横山　戦争の記憶が生々しく反戦の機運が強かった頃ですから「青年よ，銃をとるな」「教師よ，教え子を戦場に送るな」と鈴木茂三郎（1893～1970年）委員長が街頭で絶叫する場面は話題にもなり，それは選挙民にストレートにアッピールしたと思います。組織的には総評の全面的な支援が何といっても大きかったのです。総評傘下の労働組合が，選挙の候補者も出せば選挙運動の運動員も資金も出してくれる，といった有様です。医者とか文化人とかも参加してくれましたが，まさに総評・社会党ブロックとして急成長した左派社会党でした。

――偶然の機縁でたまたま左派社会党の松原喜之次さん（1895～1971年）と知り合ったということですが，たまたまといっても，道を歩いていて知り合ったわけではないでしょう(笑)。声をかけられるにはそれなりの理由とか背景とか，偶然の中身はどういうことでしょうか。

横山　私は伯父から学資を援助してもらって大学にいったのですが，理由があって1年ほど打ち切られました。その時期のアルバイト先が東京相互タクシーというタクシー会社で，その社長が松原さんだったのです。

――松原さんから目をつけられた理由は何でしょうか。見どころがあるとか，ちょっと目立っているとか，何かあったのでしょうか。

横山　学生が7～8人くらいアルバイトしていて，私はそのキャップのようなことをやっていました。だから松原さんと話す機会もわりにあったわけです。

――キャップになったことは，兵学校でトレーニングを受けたこととは関係ないのですか。

横山　関係ありません。話していて何となく傾向が分かったということでしょうね。

綱領をめぐって―1

――7のところで1955年の統一の後，西ドイツのSPDが綱領を変えて結果的に躍進したということですけれども，この当時の左派社会党はまだ議席が躍進していた時代ですよね。にもかかわらず，左派綱領が硬直化していて変えた方がいいというような話だったと思うのですが，左社が伸びているのに西ドイツのように綱領を変えた方がいいとお考えになったわけですか。

横山　左社がどんどん伸びたのは55年の統一前です。1955年に左右両者が統一された日本社会党になったわけですね。野党第一党ということで自民党に対抗する勢いを持つわけですが，統一してからは32～33%の支持率が精いっぱい，西ドイツ社民党もそのくらいで両者はあまり変わらなかったのです。

――となると，この研究会で，社会党がもう少し早く政策を現実化させていれば，もっと伸びたのだろうという意見がよく出るのですが，一方で現実化させた民社党という政党があり，防衛面でも経済政策面でも政策を現実化させたのですが，民社党の方が社会党以上に低迷した。これはどのように分析されていますか。

横山　民社党が分かれて党の方針を発表しました。それは関嘉彦さん（1912～2006年，東京都立大学名誉教授）という学者が書かれたと聞きましたが，非常によくできた文章でした。私はその文章を読んで，これは民社党に負ける

のではないか，とふと思った記憶があります。文章だけは実に立派にできていましたが現実は違っていた。民社党の方針の文章通りにやっていれば伸びたのかもしれませんが，現実の民社党の基盤は全くの企業内労働組合で言うことは会社の方針と変わらず，とくに三菱重工や富士重工など防衛産業部門を抱えた重工業関係が強く，そういう労働組合と一体関係の民社党は軍事化路線を自民党以上に推進するようなところがありました。関嘉彦さんの文章は立派だけれども，実際の民社党は全然違っていたわけです。

――６のところで，「今にして思えば労農派マルクス主義の革命論を左社綱領に採用したことは社会党の躓（つまづ）きの石だった」と書かれています。労農派マルクス主義の革命論ではなく違ったものを左社綱領に採用するべきだったということですね。

横山　そういうことです。

――それはどういうものですか。労農派マルクス主義の革命論ではない，左社綱領に採用すべきもの，それは革命論ですか。

横山　革命論ではだめだということです。議会を通ずる民主的改革は革命とは別です。

――左社綱領の根幹に革命論を据えたということ自体に問題があったということですか。

横山　そうです。民意を大事にしながら改革を進めることは，何らかの暴力をともなう革命とは別だと思います。平和革命論のいう，議会で絶対多数をとって社会主義宣言をして社会主義変革を推し進めることは，現実を考えれば簡単ではないでしょう。

――ここで言っていることは労農派であるかないかではなく，労農派が掲げていた1段階革命論としての社会主義革命路線が問題だったという意味ではない，ということですね。

横山　そうです。革命論が問題です。

――革命論を掲げたという点，綱領の中核として据えたというところに問題があったということですね。

横山　そのとおりです。

――しかし，そのとき共産党系との主導権争いの中で，理論的に革命論を出さなければならなかったのですね。

横山　そうです。

――革命論を出したことによって社会党の基盤が守られた，そういう現実はなかったのですか。

横山　先ほど申し上げたことですけれども，私はマルクス主義革命論に始めから古さを感じながら，けっきょく総評内の共産党系との主導権争いで理論的優位性を保つためには革命論をとらざるをえなかった。党派的な意味で自分を納得させたわけです。

――もし革命論を出さなかった場合には，共産党に全体的に持っていかれる可能性は現実にあったのですか。

横山　持っていかれるかどうかは分かりませんが，理論的には平和革命といった方が話が通りやすいでしょう。平和革命という言葉にはそういう言葉のあやがあるわけです。当時，共産党は武力革命方針によって火炎ビンで交番を襲撃したりしていたのですから。それに対するには平和革命論が説得力があったわけです。

――55年くらいまではそうですね。当時はあやが多かったのではないですか。革命をするつもりはなくても革命と言うけれど，実質の機能は違うことを皆ある意味では自覚していたのではないですか。

横山　それは多分あったでしょうね。

綱領をめぐって―２

――２点質問させていただきます。１点は，今ずっと問題になっている綱領の問題ですが，左社綱領ができ，その後すぐに再統一をして，そのときに右社８分，左社２分といって右派の

ほうの意見をかなり取り入れ，非常に穏健な内容の統一綱領ができたわけです。それからしばらくして構造改革論争が起き，「日本における社会主義への道」というのができ，結局，左社綱領が事実上復活して統一綱領に代わってしまう。

「道」についての話がなかったと思うのですが，横山さんは「日本における社会主義への道」に何かかかわっておられたのか。「道」についてはどのようにお考えなのか。

２点目は，バート・ゴーデスベルグ綱領の話が出ましたが，バート・ゴーデスベルグ綱領がつくられた過程を研究されていた安野正明（1956～2012年）先生という方が広島大学にいらっしゃって，安野先生とお話した時に，綱領はマルクス主義から変わったということだけに注目するのではなく，当時のドイツ社民党（SPD）は，マルクス経済学ではもうだめだ，ケインズ経済学にしなければいけないということで，かなりケインズ経済学を研究していた。では，日本社会党はケインズ経済学についてどう考えていたのですか，と質問されたので，社会党のいろいろな機関紙誌を見たけれども，マルクス経済学ばかりでケインズはほとんど出てこなかった，と答えたことがあります。今日の横山さんの話だと，サミュエルソンの経済学を独学で勉強されたということは，当時の社会党の中でもケインズ経済学は全然研究されていなかったのですか。

横山　最初の「道」のことですが，私は社会主義理論委員会の事務局に入っていました。現状分析のところにはかかわりましたが，そのときはまだ社会主義協会のメンバーでしたから，結局は社会主義協会の主張する線で締めくくるということになりました。ケインズ経済学ですが，マルクス経済学か，ケインズ経済学か，という議論をすることは当時ありませんでした。私はたまたまサミュエルソンが比較的勉強しやすいと思って買って読んだだけで，ケインズか，マルクスかという議論はしませんでしたね。

――マルクス経済学が当たり前のような。

横山　そうです。

――さかのぼりますが，左社綱領をつくった頃の左社の話です。『日本社会党の三十年』（社会新報，1974年）に書いてあったと思うのですが，左社綱領の討議中に和田博雄さんはイギリス労働党的なものを提案しょうとしたけれども，清水慎三（1913～1996年）案が出て，それに対する防衛の観点から和田案は消えてしまったのだという話が書いてあったのです。左社の中でも革命論だけではない考え方があったのかと読めるのですが，その辺をご存じでしたら教えていただきたいと思います。

横山　ちょうど私は療養生活をしていたものですから，論議の中身については詳しくありません。ただ結論はそうなるだろうと思っていたとおりになりました。

――和田さんはそのときは比較的議会政党としての社会党を考えられていたと思うのですが。

横山　和田さんのことを書いた『幻の花』（楽游書房，1981年）という本を読まれましたか。あの作者は私のところにも来られて私も少し証言していますが，和田さんはイギリス労働党左派くらいの考え方でしたが，立場上，意に沿わない左社綱領をつくらざるをえなかったのです。綱領は基本綱領と行動綱領の二層構造になっていて，基本綱領で労農派マルクス主義の革命論を取り入れ，あとの行動綱領に和田さんは自分の政策論的な考えを入れて妥協したのだと思います。

――派閥ができる背景のところで，官僚出身の和田さんと戦前から無産運動でやってきた人たちとでは肌合いが合わないと書かれています。官僚出身で和田さんと勝間田清一さん（1908～1989年）とでは同じような傾向があっ

たと言えるのかどうか。人間的な肌合いの違いや人脈で社会党の派閥ができたのか。政策以外のそういう原因がどの程度の強さ，大きさがあったのか，ということです。政策や方針，イデオロギーは違うわけで，それでグループ化が進むと思うのですが，同時にいま言った人間的な付き合いや肌合いがかなり大きかったのかもしれないですが，その辺はどうでしょうか。

横山　派閥というのは，やはり人間的な付き合いや肌合いが主でしょうね。

――政策的なというか，考え方の違いなどよりは。

横山　鈴木派は後に佐々木派になりましたけれども，親中派といわれたように外交方針は中国に近い。勝間田派はソ連に近いと言われましたね。

――そういう政策的な違い，路線上の違いはやはりあるわけですね。肌合いの違いとはどんなところですか。

横山　私の感じですが，無産運動をやってきた人たちは戦前の弾圧の中でたいへんな苦労をしてきたせいか，人間くさいというか，義理人情的な大衆性が強かったような気がします。

社会主義協会について

――派閥ができて社会主義協会の本部班は和田派に属したと書かれていますが，高沢寅雄さんとか笠原昭男さん（1928年～）とか，だいたい左派系に近いのだろうと思いますが，館林千里さん（1928～1989年）や横山さんは勝間田派というか，その当時の社会主義協会の本部班というのはどういう感じだったのですか。

横山　高沢は社会主義協会に入っていませんでした。かれは後に佐々木派に入りました。私とか野中とかが和田派だったわけです。

――野中卓さんも和田派だったのですか。

横山　和田派です。しかも中心メンバーでした。構造改革論争で派閥関係は変わりました。私も和田さんと共にそれまでの和田グループから外れてしまったのです。

――横山さんの目から見て右派の人たち，右派でも西尾派の人たちはどちらかというと同盟の人たちが中心ですが，河上派の人たちは少し違ったのではないか，河上丈太郎さんはもちろん三輪寿壮さん（1894～1956年）もいたり河野密さん（1897～1981年）もいたりして，河上派は無産運動に取り組んでいた人たちの中ではインテリだったのではないか，横山さんは河上派の人たちはどのように思われますか。

横山　あまり付き合いはなかったので，よく分からないし，三輪寿壮さんはわりに早く亡くなりましたね。河上丈太郎さんの息子の河上民雄さん（1925～2012年）とは親しくしていました。よく話したりもしました。その上の世代とは付き合いがありませんでした。

――浅沼稲次郎さんもそうだったですね。

横山　委員長でしたからね。浅沼さんはどこにでも顔を出して話をする，親しみやすい気さくなところがありましたね。

――左派社会党の人たちと右派社会党の人たちは横断してあまり付き合いがなかったのですか。例えば和田博雄などは世田谷の梅が丘に昔住んでいて，鈴木茂三郎も世田谷が選挙区で，仲が悪かったのですか。当時の左派と右派はけっこう分断されていたのですか。

横山　そうでもないと思うけれども，やはりそれぞれの派閥があると，その派閥内の付き合いの方が多くなるのでしょう。議員は国会では日常的に顔を会わせているわけですからね。我々も書記局の中で左派も右派も一緒に机を並べており，後に民社党の委員長になった大内啓伍君（1930年～）などすぐ隣にいました。だから日常的な仕事の上の付き合いはあっても政治的交流は少ないということでしょう。

――派閥の集まりは定期的にやるものですか。それとも何か問題があるたびにちょっと集まるということでしょうか。

横山　朝食会というのをよくやっていましたね。

――そこで情報交換とかするわけですね。

横山　そうです。

――本部の中で，それぞれの派閥の部屋みたいなものがあるのですか。

横山　本部にはそんなスペースはありません。議員食堂などで朝食会をやりながら情報を交換したりしていましたね。

訪ソ団，訪欧のこと

――15の訪ソ団の団長としてのところで，たまたま飲んで一緒になった学生が酔って共産党の悪口を言っていたということですが，1972年に田中角栄が日中国交正常化をすすめて，ソ連は日本と中国が仲良くなることを警戒していたと思うのですが，意外とソ連の学生に言論の自由があったのか，故意に社会党幹部にそういうことを持ちかけたのか，どんな感じでしょうか。

横山　わざととか，意図的なものは何もないです。活動家代表団は各地で歓迎を受けましたが，ソ連側の随行者が私たちの団には2人ついていました。随行している人たちはわれわれの監視役でもありますが，保養地のソチでは彼らもちょっと息抜きしたと思います。それで偶然に女子学生と同じ屋根の下で交流できたのです。

――通訳がいたでしょう。

横山　通訳はいません。私たちの中にひとりロシア語が分かるのがいましたし，英語は多少通じますから。

――向こうが目を離したすきに，そういう話ができた。

横山　そうです。全く偶然です。

――ここの学生と話したとき以外には，盗聴器を仕掛けられたとか，そういう監視はないのですか。

横山　党の委員長とか書記長とか幹部の場合は政治会談がありますから別ですが，活動家代表団ですから盗聴器をつける程のことはないのじゃないんですか。

――やったにしても，それは分からないでしょうね。すぐ分かるようでは盗聴器としての意味がない（笑）。

――1973年というと私は小学生だったのですが，当時，社会科の先生が，社会主義やソ連のことを，歯ブラシを買うにも行列をつくらないといけないとか，肉などは1時間待ちだとか，悪口を毎日のように言っていた印象があります。この頃のソ連の実際の普通の国民の経済生活はどんな感じだったのでしょうか。

横山　それは私どもには分かりません。招待されて，いいところばかり見せられているわけですから。先ほどのレニングラード大学の女子学生の話はたまたま起きた事です。

――1997年に西ヨーロッパの社会主義インター加盟の社会民主主義の方を訪問したときの印象はどんな感じでしょうか。西ヨーロッパの民主主義は進んでいるとの印象を持たれたのでしょうか。

横山　友好的な交流でいろいろな議論もしました。スウェーデン社会民主党の時には社会大臣も務めた女性書記長が出てきて，元市会議員の私のつれあいが中心に議論をしました。

――97年の時は社会民主党系の政党だけを訪問して議論などして，国の中などはあまり見なかったのですか。

横山　そんな時間はありませんでした。もともとの企画が元総理の村山さんをダシにしてヨーロッパ旅行をしょうということですから（笑）。でも，みな勉強になったと喜んでいました。私も勉強になりました。

安倍政権をめぐって

――２のところで安倍政権の富国強兵路線に対抗するビジョンということを言われましたが，どんなことが考えられるでしょうか。貧国弱兵路線とかいうことではなく（笑），どんなことが考えられるのか，もしお考えがあったら。

横山　富国強兵路線といったのは，最近イギリスのフィナンシャルタイムスの編集長が，安部政権の今の行き方は富国強兵だといったので，なるほどと思ってね。富国強兵という言葉は明治維新政府の中心スローガンで過去のことだとばかり思っていたのが，指摘されてみると安倍政権の路線にピッタリの言葉で印象に残ったのでここで触れたのです。今の安倍政権への支持率が高いのには，戦後の平和と民主主義の体制での負の遺産が関係していると思います。１つは非武装平和主義の憲法のもとで，戦争への反省もあって国民の国家意識がずいぶん希薄になったと思います。国を強くしようという安倍政権の言い方は，その国民の素朴なナショナリズムに訴えており，負の遺産をうまく利用していると思います。

もう１つは教育問題で，戦前の修身教育に戦後革新勢力は反対してきたけれども，戦後民主主義の中で個人主義というより利己主義がはびこってきた感じですから，国民のモラルがよく問題になっています。安倍政権の教育改革は，自民党の憲法改正草案にあるように国家が上から規範を示そうということで間違っていると思いますが，国民のモラルを何とかしょうという姿勢はそれなりに国民に受けるところがあると思います。修身教育への批判が先に立って民主主義を本当に根付かせようとする姿勢が戦後革新勢力には弱かったから，それが負の遺産となって安倍政権の教育改革重視の姿勢に有利な条件となっている，その辺を政権を担う民主党はもっと考え，何が国民のためになるのかというビジョンをもってほしいと思うわけです。

社会党への入党，村山内閣をめぐって

――もう一ついいですか。私の家は，父親が社会党でずっとやっていて，親類からは非常に激しい非難を受けながら，しかし非常に仲良くやっているのですが，横山先生は1950年代中盤に社会党に入っていくわけですね。

横山　そうです。53年。

――その時に，社会党もやがて政権をとる政治勢力となり，それにくみするという意識はあったのですか。つまり，私の父親は，社会党だってやがて権力をとるのだから，極端にいうと，今は政友会だけれども当時の民政党よりちょっと左だけれども民政党的なところでやるのもいいのではないかと。こういう行動様式は，ありですか。親類の皆さんが許容する時に，もしかすると社会党も大きくなって体制の一つになるかもしれないから，あいつがあそこに行くのもいいのではないかという感じはあったのかどうか，そこら辺はどうでしょうか。

横山　ご質問の意味がちょっと分かりにくいのですが，社会党の中で政権を取ろうという意欲があったかということですか。

――違います。社会党もやがて政権につくだろう，あるいは権力を持てるだろう，したがって社会党に自分が参加するのは，別に革命とか何とかいうことではないのだという意識はあったか，なかったか。

横山　社会党はいずれ政権をとるだろうという考えを持っている人は，多かったのではないですか。

――片山内閣が終わった後しばらくなかったけれども，50年代になってもそういう意識はあったと考えられますか。それはいつ頃なくなったのですか。あきらめたのはいつ頃ですか。(笑)

横山　左社綱領ですよ。

――そうか，左社綱領か。

横山　向坂先生は，政策審議会なんて要らないと思っている等と私に言われたことがあります。要するに革命のための準備をすればいい，あの方はその点では徹底していました。

――政権奪取という目標を掲げて多くの人が社会党に入り，自分たちの政権をつくるのだという望みを抱いて活動されてきたと思うのですが，ずっとそうだったのですか。つまり村山政権樹立までそれは変わらず，村山政権ができた時に，やっと我々の年来の目標が達成されたというような形で受け止められたのでしょうか。

横山　そうではありません。村山政権はひょっこりできたわけですからね。

――それは社会党が目標として掲げていたような政権奪取のあり方ではなかったということですね。

横山　村山政権は自民党が村山さんを担いだというだけのことですから。

――社会党が自民党にとって代わって政権につくことは無理らしいという話は，社会党の中になかったのですか。

横山　1993年に55年体制が事実上崩壊して社会党もガタ落ちして，政権をとる意欲などなかったのです。

――その前は目標としては社会党の単独政権ですか。

横山　55年体制の初めの方はいちおう単独政権を目指しました。

――ところが，選挙では単独政権を樹立できるだけの数の候補者を立てなかったわけですね，

横山　公明党が出てきましたからね。それで連合政権をイメージするようになった。

――政権構想にもそういう変化があった。

横山　もちろんです。単独で政権をとる力はない，ちっとも強くならないわけですから。社会党は長期低落傾向から抜け出せない，などといわれていましたからね。

――それで連合政権でなければだめだということで，公明党などと一緒にやろうというのが社公合意ですか。

横山　そうですね。あの頃は公明党も野党でしたから，公明党をまきこんで社公民３党連合という方向がでてきたのです。

昭和30年代再考

――１の「平和四原則」にもどるのですが，選挙のたびに左社が非常に伸びていったというのはいろいろなものに書いてあるのですが，その後，横ばいになり，社会党勢力が伸びなくなる。伸びなくなったのは，四原則で掲げていたことがすべて実現しなかった。全面講和も中立もできず，西側に組み入れられ，自衛隊ができ，再軍備反対も唱えるだけとなり，米軍基地反対も，要するに４つとも何も実現しなかったわけです。それが分かって社会党への支持が横ばいになったのか，それとも左社綱領が要因で伸びなくなったのか，どちらでしょうか。

横山　昭和30年頃まではまだまだ戦後だったわけです。昭和30年には「もはや戦後ではない」と言われるようになりました(『文藝春秋』1956年２月号，中野好夫による評論の題名。７月には『経済白書』で使われ，流行語になった)。左派社会党が伸びたのは昭和30年以前のまだまだ戦後気分，反戦平和の気分が強く残っている頃です。昭和30年頃から後，経済は高度経済成長期に入っていくわけです。反戦平和意識は安保闘争の時が頂点で，所得倍増計画で「政治の季節」は「経済の季節」へと変わってしまい，それ以降，社会党は長期低落の傾向をたどるようになるわけです。

――有権者の意識が変わったということですか。

横山　そうです。有権者の意識とのズレが大きいです。

――左社中心で社会党が勢力を伸ばしていくのは，55年くらいまでですよね。これは私の仮説で何の根拠もないのだけれども，共産党が50年問題で混乱をして55年で統一を回復する。その間，行き場を失った元共産党あるいは共産党支持者など若い学生や労働者が，共産党が混乱しているために左社に来たということはないのでしょうか。そのために左社が勢力を伸ばした。今日の話では，野中さんや高沢さんという元共産党の方が左社に入ってきた，そういうリーダー層ばかりではなく，支持する階層で共産党を離れて左社に入ってきた人たちはかなりいたのではないかという気がするのですが。

横山　それは多かったのではないでしょうか。

――それが左社の躍進を支えたと言ってしまっていいのでしょうか。

横山　あるでしょうね。共産党を支持した人たちが左社を支持したというのは，かなりあると思います。

――共産党は55年に統一を回復して，ある種まともな形で活動を始めたので支持者が再び吸収されていき，その分左社の支持が減っていくという面があったのでしょうか。

横山　あるでしょうね。

――横山さんは書記から中執になられるわけですね。議員になるという話はなかったのですか。

横山　あったけれども，議員というのは大変ですからね。体力に自信がありませんでした。タフでなければやれません。徒手空拳で議員になるのは大変です。資金面でも地盤づくりでも。

――社会党の場合は，あまり面倒みてくれないのですか。自分でやれということですか。

横山　どの党でも，まず自力でしょう。うちの選挙区から出ないかと言ってくれた人もいたけれども，体力的にも資金面でも自信がありませんでした。私が一緒に机を並べた人の中から何人も議員になったけれども，ある先輩は議員は人足だといっていつもこぼしていました。とにかく自分の支持団体や支持者のところをしょっちゅうぐるぐる回っていないと，基盤を維持できないのですから，本当に大変だとこぼしていましたよ。

――国民生活局長としていろいろな運動にかかわられたわけですね。総評との関係はどのようでしたか。

横山　一体関係でやっていましたね。総評の運動はカンパニア（ロシア語。英語の「キャンペーン」）型で，要するにデモをやってスローガンを叫んだり，シュプレヒコールを行ったりのパターンですが，その時にこちらの関係の議員も一緒に参加して演説などをあちこちでやる，そんなパターンが多かったです。

――いろいろな運動で集会をやるとか，デモをやるという企画を立てたり，方針を打ち出したりというのは，社会党がやるのですか。社会党が，例えば何日にこの問題で集会をやるとか，デモをやるという企画を立てたりして，総評によろしく頼むということで要請なり協力を求める形になるのですか。

横山　日常的に総評生活局とは接触していますから互いに相談してやるのです。

――定例化されているようなものがある。

横山　もう電話一本で。お互い顔も気心も分かっているからツーカーの関係でした。

1970年代のことなど

――総評でよく付き合っていたのはどなたですか。

横山　私は総評の生活局の常任幹事や書記局が多かったです。

――国民運動局ではないのですか。

横山　国民運動局は平和運動の担当です。

70年代の初めに総評では生活闘争のために生活局ができたのです。その担当の常任幹事がいました。

――70年代初めというと，インフレや物価高反対ということで。

横山　公害が一番の問題でした。公害があちこちで目立つようになり社会問題化していました。それから物価高とか救急医療の問題とか。地元の社会党の組織や自治労その他関連労働組合とか市民団体とか，みんなで集まって討論したり，自治体と話をしたり。国会議員などもその現場に出向くわけです。村山さんや多賀谷さんなども衆議院社労委員でしたから，今度どこそこで次にこんなシンポジウムや集会をやるから来て下さい，とよく頼んだものでした。

――総評との関係はかなりスムーズに。

横山　それは密接でした。今でも総評OB会から連絡がくるくらいです。

――地区労（市や区など一定地域内の労働組合が結集して作る組織）というのがありましたね。あれが60年代くらいまではすごく機能していたのが，現在はどうなっているのか，ご存知でしたら教えていただきたいのですが。

横山　地区労はもうないでしょう。連合ができたときに解散したけれども，抵抗して残っているところが部分的にあると思います。

――地区労と社会党とは，どういう関係でしたか。公害反対闘争で地方で問題が起きたときには地区労もかかわっているわけですよね。

横山　そうです。

――しかし大衆運動の方はあまりやらなかったのではありませんか。地区労は主として選挙でしょう。

横山　中央が財政的に地区労を応援していましたからね。それで地区労の活動ができた。それを連合が止めてしまった。

――総評の下部組織として基本的に地区労があり，連合になったときにそれを改組再編して地域協議会と地域連合になった。地区労だけに加盟していた労働組合は全部産別加盟に組織的に再編をする。しかし，それは厭だというのがそれぞれのところに少しいて，そういうところは残るわけです。地評でもそうです。東京地評は残っています。残ったところの地区労は全国組織をつくり，協議会のような形で年に１回経験交流会をやっている。しかし，これはそんなに多くないです。

――公害反対闘争というのは，それぞれの現場，例えば四日市に出かけたりされたのですか。

横山　いつも現場に行きました。現場主義です。

――水俣などにも行かれたのですか。

横山　水俣は70年の元日早々から厚生省前で患者，支援者たちが座り込みをやっていて，私が国民生活局長になって真っ先にやったことは，元日早々から座り込みをやっている人々に対する激励行動を行うことでした。それが国民生活局長になって最初の仕事でした。

――プロフィルを見直していたら，1963年に米国務省の招待で米国内各都市を一周旅行して，各地で意見交換と書いてありますが，どのようないきさつでアメリカ国務省から招待がきたのか，アメリカを一周回ってどんな印象を持たれたのか，それをお聞きしたい。

横山　党の国際局を通じて，アメリカ国務省のリーダーズ・エクスチェンジ・プログラム，指導者交換計画により行ったのです。

――これはケネディ・ライシャワー路線（ケネディ大統領･ライシャワー駐日大使の時代に，野党や労働組合など反体制派との交流を積極的に進めた政策）の一環でしょうね。

横山　そういうことでしょう。

――労働組合の幹部もかなり招待されて行きましたよね。

横山　そうです。労働組合とか地方新聞の編

集長などとも向こうで会いました。

――社会党に対する懐柔工作だな。(笑)

――それでアメリカに対する印象がよくなったということですか。

横山　アメリカという国が少しは実感として分かる面はありましたね。

――アメリカに行き,中国に行き,ソ連に行ったわけですよね。どこが一番よかったですか。(笑)

横山　中国やソ連は上っ面の旅行ですから。歓迎の宴席を回ってきただけのことで，地方の人との接触はありません。もし，それができれば面白いでしょうけれども。

――幹部と酒を飲んで話をするくらいですか。

横山　そうです。幹部と乾杯し合うだけです。

――これは完全にケネディ・ライシャワー路線ですよ。これで懐柔籠絡(ろうらく)され,ころっと変わってしまった労働組合指導者もたくさんいる。

――アメリカ各地を一周した印象はどうでしたか。

横山　銀行家の奥さんなどでボランティア活動で泊めてくれる人がいましたね。デンバーに行ったとき，いろいろな話の中で私がヨガができると言ったら，その奥さんは地域新聞の社長ですぐ社員を呼んで，頭立ちしている私の写真を撮って翌日の新聞に載せました。私はその地域でいっぺんに有名になってしまいました。

――ホームステイですね。

――50～60年代に，総評でいちばん影響力があった日教組とか国労とか自治労とかの中で，どういうところが理論的なリーダー格でしたか。

横山　かっては「官の国労，民の炭労」といわれたくらいで，この二つが官民それぞれの横綱級でしたね。国労や炭労出身の国会議員も多かったですね。

――岩井章さんとか，富塚三夫さんとか。

横山　そう。みな国労ですよね。民間で合化労連の太田薫なんて人が総評議長になるのは珍しいですよ。民間は炭労や私鉄総連などが力を持っていましたね。

――炭労，私鉄ですね。炭労は60年安保とか三池闘争までですね。

横山　エネルギー革命の後は炭労はもうダメです。この（社会党・総評史）研究会は総評の方と並行してやってらっしゃるのですか。

――この前，富塚さんに来ていただきましたが（本誌678，679号）社会党といえば総評，総評といえば社会党という密接なかかわりがあるので,今のところ中心は社会党ですけれども，総評の方も。

――例えば平和四原則の時に，総評が先に掲げて社会党が後から賛成するのか，先に社会党が掲げたものを総評が後から支援するのか，どちらですか。

横山　平和四原則は社会党です。

――ものによって違うということですか。

横山　総評は組織支援ですから。組織的支持関係を受け持ち，大衆運動を受け持つ。政策は社会党ということです。

――政治方針や政治闘争，政治的スローガンは，組合はどうしても副次的ですから。協会との関係は77年までは一緒にやっていたと考えていいのですか。

横山　77年の前に協会が割れましてね。いわゆる向坂派協会と太田派協会に割れる。割れた理由はよく分からないので，社会党本部班はどちらにも入らない，片方に与しないことにしました。

――割れた時から距離をとっていたということですか。

横山　そうです。しかし私が77年に役員選挙に立ったときは太田派と書かれました（笑)。向坂派には憎まれているから太田派に違いない

と思ったのでしょう。

――しかし，太田派ではなかったということですね。

横山　入っていませんでした。しかし，その大会の役員選挙では反向坂派の雰囲気の中で，青少年局長に太田派の深田肇君が入って，彼からは感謝されました。

――社会党の場合，例えば最後は農村党のようになったのでしょうか。都市では票が取れず，農村部の方が集票量が多かったのですが。

――日本社会党の場合だと，悪い意味ではなく，社会の遅れた部分というか，産業的には先端でない部分が社会党の支持層になる感じがあるのだけれども，世界では社会民主主義政党はそれではもたないところがあり，先端的な産業にも基盤を置かないとやっていけない。そこら辺のことは，イギリスやヨーロッパの社会民主主義を見ていてどう感じられましたか。

横山　社会党の支持基盤が総評中心だったことが，いちばん大きいのではないでしょうか。農村地帯では昔の小作争議以来の伝統もあるし，農村に票を持っている人も多かった。社会党が勢いのいい頃は，都市部が敏感に反応して東京など大都市では1選挙区で複数の議員が出たこともありました。ところが落ちだすと都市部がまず支持層が減っていく。社会党の長期低落傾向といわれた状況の中で，都市部はどんどん減るのに比べ，農村の方は相対的に減り方が少なかったということではないでしょうか。

――都市部で落ちていく原因は，どのように分析されていたのですか。

横山　最後の頃は社会党の基本戦略に問題があるな，と感じていました。構造改革論争で社会党の中の左派の実態が表に出たわけです。社会党は左右論争をやるけれども，なぜ江田三郎さんの構造改革論に反対するのか，という素朴な疑問をよく聞きました。江田さんはソフトな語り口で茶の間に人気があり，分かりやすい話をするのに，左派は江田は改良主義だといって批判し反対する。そんな構造改革論争がつづく中で社会党の実態がマスコミを通じて国民の目に映ったわけですから，社会党が時代に対応できてないという印象が広まったのではないでしょうか。

――古くさい党という印象を出してしまったわけですね。つまり，江田を叩くような感性の中に，およそ都市化のようなことに対してちゃんと対応できてない集団だという印象を持たれてしまったわけですか。

横山　都市部がいちばん社会党の実態に敏感に反応したと思います。

――なるほど。ありがとうございました。

付記

原稿を読み返して，自分の総括の不十分さに気付かされた。冗舌と思われる部分や不本意なところは削減し，不十分なところはこの「付記」で若干補足させていただいた。当日参加の皆さまには何とぞご了承をお願いしたい。

削減量が多いのは，派閥に関する私の発言とそれに対する質疑の部分である。一方，不足していた構造改革論提起による派閥の傾向変化の問題は，かなり補足した。派閥に関して私が鈴木派の性格を「泥くさい」と評したため，この点に質問が相次いだ。そして自分の不用意な発言を悔いた。「鈴木さんも泥くさいですか」との質問は私の発言の矛盾を衝いた。鈴木茂三郎氏は㈱揖斐川電機の重役だった私の母方の伯父とも懇意で，また鈴木氏が社会主義理論委員会の委員長だったとき私も事務局員の一人として氏とは話す機会も多く，私は鈴木氏を「悩めるインテリ」と見ていた。だから鈴木派をひとからげに「泥くさい」というのは私自身の事実認識とも矛盾していた。「泥くさい」を不用意に

使った私自身の深層心理には，和田博雄という貴重な政権要員を疎外（棚ざらし）した，鈴木・佐々木派という主流派閥への反感に近いものがあった，と自己分析している。

私は，社会党が60年代に和田博雄首班の革新政権を実現できなかった最大の理由は，思想面では労農派マルクス主義の革命論，派閥的には主流派の鈴木派・佐々木派の閥利優先の行動だったと考えている。それにしても「泥くさい」という表現は不適切で，せめて「義理人情的，庶民的」とでも言うべきであった。

以上のことは，派閥への考察の不足の裏返しであり，私は1950年代後半の「八個師団」と揶揄された当時の派閥集団への不快感をいつまでも引きずっていて，派閥は人間関係という固定観念に捉われ過ぎていたことを，質疑応答の過程で否応なく自覚せざるをえなかった。このため派閥の性格に関して質問された方には納得していただけるはずがなく，申し訳なく思っている。だが考えてみれば，構造改革論提起以来，派閥関係は構造改革推進派と反構造改革派に色分けされたのであり，その事実関係は私自身が口述したことでもあった。だから1950年代後半の派閥と60年安保のあと構造改革論が提起されてからの派閥には派閥の傾向に差が生じたことに着目し，そのことを整理しておくべきであった。

構造改革論が改良主義をタブー視する左社綱領的発想を大きく揺るがした事実は否定しがたい。構造改革論提起以来，各派閥はタブー視されていた戦略思考の方向にシフトしていったのであり，それが社会党自身が加盟していた社会主義インターの民主的改革路線へ回帰していく端緒となったことは，その後の事実経過が証明している。社会主義理論委員会の結論は，反江田で結集した党内左派による派閥力学のなせる業であった。

なお，四十年不況をマルクス主義経済学が見誤ったことに失望した旨述べたが，その失望感はマルクス主義経済学そのものに対してというよりも「戦争や恐慌など客観的危機が革命の機運を高める」とするいわゆる危機待望論に対して向けられたものであったことを，一言付け加えておきたい。

（横山記）